◎テニスコート新設　運動の要は體を練ると共に、趣味を養はざるべからず、陸上運動部こゝに見る所あり、新にテニスコートを本校前庭に設け、五月十七日を以て完備す。それテニスの技たる、趣味津々として變化の妙に富む事、豈よく他技の及ぶ所あらんや。さりながら僅に一個のコートを以て一般の需用に應ずべくもあらず、今やテニスは益々隆盛に趣き、コートの不足を歎ずる聲高し、吾人は切に之が增設を希ふ、否、之が增設の日、近きにあらん事を信じて疑はざるなり。

◎草塲先生　七月一日、炎暑赫々たるの時、わが親愛なる草塲先生には、召集に應ぜられ、三週間の勤務を終へられて、再び敎鞭を執らせ給ふ、吾人は先生の健全なる風貌に接するを得たるを喜ぶものにして、益々先生の本校の爲めに盡力せられむを望切してやまざるものなり。

◎樋口學校醫　大日方校醫、不幸にして不歸の客となられてより、茲に本校校醫、暫く欠如たりしが、昨年七月一日、樋口繁次郎氏本校々醫として任命せらるゝ事となりぬ、氏は本校出身にして、早く業を岡山醫學專門學校に享けられ、爾來專ら仁術に身を委ねられ、殊に盛名あり、今回大日方氏の後を襲るゝ事となりぬ、吾人は頗る其人を得たるを喜ぶ者にして、願くば本校に靑白瘠軀の者を絶たしむべく、氏の大に本校の爲めに盡されん事を望むで止まざるなり。

◎劍柔兩道夏期大會　七月五日、劍柔大會を催さる、蕭々たる霏雨をついて、觀者塲に滿つ、午前八時より劍道仕合、前後三十八回、其番組と成蹟とは左の如し。

〇〇雨森良須
〇〇青木泰治郎
〇〇尾田隆明
〇〇尾本德二郎
〇〇青木泰二郎
〇〇佐成謙太郎
〇〇天野捨造
〇〇清水武佐
〇〇前川繁治郎
〇〇目加田捨三
〇〇蓮井静
〇〇山本於外也
〇〇木村誠一
〇〇前田信三郎
〇〇大東顯吉
〇〇淺見倭雄
〇〇横田宇吉
〇〇中村竹治郎
〇〇北川久一
〇〇白井龜治郎
〇〇折笠晴俊
〇〇日比松三郎
〇〇尾川織市
〇〇谷田一郎

〇〇中村竹二郎
〇〇井上良三
〇〇大鳥居亮
〇〇北村善正
〇〇木村喜治郎
〇〇横山義次
×宮野專太郎
橋本源二郎
〇〇岸和田金助
〇〇炊殿雄一郎
〇〇平瀨東爾
〇〇木村清三郎
〇〇上坂勝
〇〇北村善正
〇〇井上良三
〇〇大東顯吉
〇〇田中恒太郎
〇〇村上義一
〇〇横山義次
〇〇淺野治三郎
×橋本寺前
〇〇久一
〇〇伊造
〇〇北野憲三
〇〇西村文郎
〇〇畑中義行
〇〇廣瀨淵龍
〇〇谷田一郎
〇〇日比松三郎
〇〇川尻靜雄
〇〇岸和田金助
〇〇淺見倭雄
〇〇青木九一郎
〇〇小澤啓三
〇〇村林善一
〇〇平瀨東爾
〇〇宮野專太郎
〇〇川南貞二
〇〇山本繁七
〇〇西村正一
〇〇大東三男
〇〇山本繁七
〇〇川南貞二
〇〇西村正一
〇〇小出先生
〇〇杉浦先生
〇〇北古賀先生
〇〇伊藤先生
〇〇平瀨福永先生
〇〇平瀨先生
×杉浦先生
樋口先生

以上

其中にて目ざましき仕合は

大東—淺見、孰れも年少紅顏の士、敏捷にして鋭き太刀先、そゞろ舌を卷かしむるものあり、暫し打合ひたる後、淺見は突を入れしが、大東もさるもの、忽ち小手を切り返し、必死に戰ひしが遂に面を擊て淺見の勝となる。

北野—西村、竹刀を合はすこと數合、隙を見出して西村まづ面を擊つ、されども流合は北野、小手と面とを入れたる早業、實に見事なり。

川南—山本、正眼に構へたる川南が得意の小手を切りたるに、山本も何ぞ默せん、忽ち小手を返しぬ、仕合は今や酣なり、と見る間に、紫電一閃、又もや小手を切りて川南の勝となる。

西—大東、四段の驍將、右に顯れ左に沒し、秘術を盡して戰ふ樣、さながら龍虎の雲を爭ふが如く、悠々たる其態度、一刀おろそかにせず、そら來たの聲と共に烈しき擊竹の響、まづ大東小手を落し、西村突を返す、戰今は酣に、兩士の意氣天に冲す、觀者も汗を握りしが、いと鮮に胴を切りて大東の勝。

午後より柔道は開始せられぬ。形——源氏車、絹被、小手返、受方、寺前伊造氏、取方、大東、西村、上坂の三氏なり。何づれも劣らぬ斯道の熱心家とて、其術の輕妙なるは、見る者をして舌を卷かしむ。

亂取は山上先生の審判の下に、十數番行はれぬ。いづれも神技鬼術を用ひ、奇策妙計を盡して、勇壯天を衝くの慨あり。いで此處に其主なる勝負を記さん。先づ第一に現はれ出でたる二人の小兵を誰とかなす曰、佐成、曰、青木。何づれも新進紅顏の士なれども、日頃の手ゐみを示すは此處なるぞと、上にあり、下にあり、互にもみ合ひつゝ戰ひしが、遂に青木は投捨を以て勝を取りぬ。

雨森良順—尾田隆明、雨森、投捨と捨身で勝つ。

山下欽哉—前川繁次郎、同等の力の者とて、おか〳〵勝負つかざりしが、山下首一本、まいらして勝つ。

佐成鎌太郎—小田切直行、佐成勝つ。

青木泰次郎—尾木德治郎、青木再び手ナタにてまいらす。

尾田隆明—加田誠一、尾田、投捨と首にて勝つ。

上池林彌—中村他家次郎、上池、足懸ナタにて勝つ。

横田宇吉—井上良吉、横田は音に聞えし大の男、井上は一人前にも足らぬ小兵なり。井上、飛びついて組むよと見る間に、共に後へドーと倒れ、早くも足ナタを取れり。此れにて井上、少し安心する處を、横田、ステンドンウとのけざまに倒し首一本進らせたり、此處に二人は今一つの勝負ありとて、互に奇策妙計を案じつゝ、鷄の喧嘩よろしくと云ふ樣にて、瞋み合ひしが、横田、ムヅと井上の襟をつかむよと見る間に、捨身一本、遂に勝を取りぬ。

蓮井靜—木村誠一、木村コロリと負けぬ。

木村清二郎—日比松三郎、木村、伏ナタにて勝つ。

橋本源次郎—宮野專太郎。橋本、一度に勝つ。

山田隆吉—北村善正、共に大の男、容易に勝負決せざりしが、遂に山田の勝ちとなりぬ。

井上良吉—前田信三郎、井上勝つ、

清水義成—横田宇吉、五年の功を積みしだけ有りて、首一本をまいらせて勝つ。

日比松三郎—宮野專太郎、勝負決せず、分けとなる。

上池林彌—淺見倭雄、勝負定だかならねども、軍扇は上池の方へ上げられぬ。

清水義成—白井龜之助、清水、勝を得る。

大東三男—川南貞二—上阪勝。何づれも本校屈指の驍將。且つは各級よりの撰手なれば、いかなる目ざましき勝負が起るらむと人々手に汗を握ぎれり。先づ大東と川南、組みつ組まれつ、立ちつ倒れつ、恰も小犬の戯るゝが如く、上にあり下にありしつゝ爭ひしが大東ナタを取る。處へ又上阪現れ出で川南の敵、まてよと云はぬばかりにかまへたり。ヤアと聞ゆる掛け聲と共に大東はナゲにてコロリとやらる。川南、我こそと出で來るを又御得意のナゲにて負し遂に勝を得たり。

此れにて柔道は終りをつげぬ。

柔道仕合の終りを告ぐるや、待ちに待ちたる數十の勇士、源平二軍に立わかれ、滑稽の中に銷をけづりしが、更に三人抜きを催ふされ、各興を盡して散じぬ。

◎第一學期試驗　千草の花咲く春は、いつしか過ぎて、今は早や、木々の綠も增さる夏とはありぬ。此所に本校は例により七月十五日より第一學期試驗を執行せられ、同二十一日無事に了れり。

◎岡見少將閣下の演說　閣下は我が舊彥藩の出身にして、維新の役より、早くも身を軍籍に置き十年の役より日清の交戰に、彈丸硝煙の間を驅馳せられ、殊に大功あり、官陸軍少將に累進せられしが、不幸耳疾の爲め豫備となられたり、爾來故山の風色に、閑日月を送られ、專ら後進子弟の爲めに計らるゝ所ありき。

七月二十一日閣下親しく本校に臨まれ、懇々生等の爲めに一場の演說をせられたり、今其の要を左に錄す。

其れ世は競爭あり、人は戰士あり、苟も人にして一事をなさむとすれば、必死一還心あるべからず、而して今や各國と交り、彼等と伍して進まむとするの時、諸子の一擧一動は實に國家の盛衰に懸れり、諸子の任其れ豈に輕らむや、而して其任を果すに、農を以てするも可からむ、商工を以てするも可からむ、

將また文理醫其の他の事を以てするも元より可かるべし、されど見よ、今や滿洲危く、韓半島將に呑まれんとす、國家の安危實に此秋にあり、此秋に當つて國民の將に務むべき事は實に軍國の務にありと云はざるべからず、抑も我が舊彥藩は武を以て四海に輝きしもの、井伊の赤鬼の名は、いにしへ戰國の戰士をして、戰慄止まざらしめしものあり、然るに維新の變革より一變、鎖々たる事情より進んで武人即ち、軍籍に身を委ぬるもの少く、爲めに三百年來尙武の土地も、四五の武人を除いては、進んで軍籍に入りしものあし、現今全國比例を取れば、我が彥藩出身のものは、全陸軍將校の百分の一に過ぎず、嗚呼之を以て昔日の赤鬼の子孫として世に誇るを得べきや、余海軍の事に暗し、されど思ふに陸軍と異あらざるべし、其軍にあつて、將は親あり、士卒は子弟あり、相助け、相勵し、一致團結以て强敵を破るべきあり、此の故を以て、其長官と士卒との同鄕ある事は、此團結に最も大ある功果を與ふるものあり、

諸子覺悟せよ九聯隊長は滋賀縣出身の軍人たらざるべからざる事を、斯く上述の如く我縣下即ち舊彥藩出身の軍人は實に僅少あり、而して此事は單に之れのみにあらざるあり、斯くの如きの事情あるを以て、辱くも舊藩主井伊伯爵家に於ては深く此事を悲まれて、年々二千金を醵出して、文武學生の爲めに貸費せられぬ、此れ誠に諸子の爲めには又逸すべからざるの好機あり、諸子豈に此の好機を逸して可からむや、宜しく他日の大成を望む。

右畢りて隨行の加藤一等軍吏は、貸費生の事に關して述べらる曰く。

諸君、諸君の日々登校して勉學せらるゝは各其目的ありての事あり、而して必ず大名をあすの一に歸せむ、定木的に云はゞ、各好む所に從ひて勉めあば、大名必ずあすべからむ、さりながら見よ、今や世は學者を以て滿されて、新進の士の進むべきの餘地あし、徒に二千餘金を費して學士の稱號を得、而して僅に三十金を得て口に糊す、碌々として暮し、蠢々としてあすあきより、要止むあき而も名譽ある、帝國軍人とあるに若くはあきあり、誠に軍人とあるには最簡易にして、且つ貧書生には最も適當ある立身の道あり、殊に貸費に依る時は、中學五年の學費と候補生時代の小遣ひ少許を貸費せられ三年後は、正八位陸軍少尉てふ奏任官とありて、陸軍大臣、候補者たる名譽ある地位に上らるゝあり、豈に盛あらずや、而して前の貸費は年賦返濟すれば可かるあり、斯くして年限に從ひて昇進するあゞの事は到底他に比すべき者とてはあきあり、諸君、立身の門は即ち之あり、貧は苦むに足らず茲に貸費あり、來れ諸君、若し詳細の貸費生に關する規定を知らむとせば後日拙宅に問へ、時に限りあれば、之を以て止む

◎新銃器　其れ兵の向ふべきものは心あり、然りと雖も、兵器にして備はらざるに於ては、未だ兵備完しと云ふべからず、今回三十年式五連發銃八十を新に購入せられたり、此れ實に本校の爲めに賀すべきの事にして、之を使用すべき諸子たるものは、之の新銃器に對し、至大の尊敬を拂うと共に、益々心の練訓を怠らず、よく軍規を守り、使用の法に熟練すべきあり。

◎武德會第三回端艇競爭會　頃は去んぬる葉月四日、武德會は第三回端艇競爭會を、例年の如く大津三保崎に於て催しぬ、本校も之れに加はり我等が勇敢ある撰手諸君は、之れに先立つ數日早や該地に出征せられたり、我れ等命を受けて大津に到りしは三日の午后ありき、汽車を下れば市内は何とあく賑やかに、何々學校生徒宿舍、さては新聞社前に大きやかある白紙に筆太に且つ朱にて圈点附し明日の番組を張り出だせる大に人目を引く、會場近くの濱邊に到れば、たゞ見るものは白布掌に捲きつけ、麥帽短褐の黑面漢の濶步するが、或は忙がはしげある役員達のすがたのみ、今は人氣稀れある此の濱邊も、明日は人の山をあし、赤！白！青！の大叫喚の巷と化しなむ、あゝ幸あれかし我が撰手諸君と獨り祈りぬ、夕刻に至り撰手諸君の宿舍ある鶴浦館に行

けば、撰手諸君は小出先生と共に交道館に於て、楠委員長、田島博士、及び仙頭海軍中佐の競爭會に關する訓示演說有るを聽きに行かれしとて留守ありき待つこと半時許にて小出先生及撰手諸君は還り來られぬ、諸君の黑き瘠せたる顏、光るものはたゞ二つの眼のみ、あゝさもありなむ、鉄も熔けむ三伏の日、櫛風沐雨少しも意とせず、楫を枕に朝も夕も、我が校の爲めに、我等四百の代表者として、よく其の責任を重んじ、苦しみ勵み給ひしものを、あゝ感謝に堪へず、而かも其の夕、平常一ダース位半氣なる諸君の二三杯づゝの小食家たる見、我等は其の苦勞の程も忍ばれて座ろに感謝の涙に咽びぬ、然りと雖も我等は咽びながらも諸君が明日晴れの場所に於て勇敢に男らしく振舞はれんことを想像し、樂しみつゝ寢に就きぬ、

明くれば愈競爭の當日とはなりぬ、あゝ憂世なるかな昨日迄續きに續きし快晴の空も今日は雲湖面に近く、遂に午前六時頃より雨滴軒頭に音をなすに至れり、かくては競爭會もいかにやと案じ居りしに午前八時、數發の煙火は鳴湖に響き渡りて、雨中競爭會の開會を報じぬ、是に於て我等は取るものも取りあへず、會場にと急行しぬ、會場の模樣は、入口には大津市の寄附にかゝる大綠門を建設し、各國々旗幾千、其の傍を裝飾せり、場內には夫々席を分ち、來賓席は大浦警視總監、渡邊子爵、鈴木知事を初め、官吏紳士を以て充てり、學生席は宛然たる學生共進會、和服なるあり、洋服なるあり、制帽なるあり、麥帽子を被れるものあり、又大津病院出張所の設けあるなど、注意甚だ到れり、殊に壯觀なりしは各組の出艇及決勝点に近づく毎に合奏する大津同窓會の音樂隊なり、只哀れなりしは場內の水氷店なり、軒頭の「氷」印の旗は打萎れて雨滴垂れ、客を呼ぶ聲はとぎれたり、我等の會場に至りし時は恰かも第二回競爭の勝利者なる愛知縣第一中學第二撰手の、楠委員長の手より授賞しつゝある所なりき、已にして第三回は終はり第四回となりぬ、是れぞ我校第二撰手

(青)、德島中學校(白)、本縣農學校(赤)、の競爭なり、折りしも降り來る雨は篠つく如く、觀客は皆天幕の中、或は傘の下に走り入りぬ、されど健兒はものともせず、三艇等しく漕ぎ出でたり、我が勇士の艇は忽ち他の二艇を秡き進みぬ、已にして白は其の調子亂雜なるにも拘はらず、其の躰格の偉大に腕力の强きを以て無二無三に力漕を續け我れを越せしかば、我が勇士等何ぞ劣らむ、最后の奮鬪を試み、將さに是れを秡かむとせし刹那、一發の砲聲は轟き渡り、遂に竪子の名をなさしむ、それより第五回は過ぎ、第六回の競漕は來たりぬ、是れなむ我校第一撰手(青)、高知第一中學校(赤)、大阪天王寺中學校(白)、の競爭なり、蒸氣船に引かれつ、出發点に向ふ時の撰手諸君の胸中やいかに、觀る我等の心臟さへ高く跳りしに、見よ、撰手諸君の態度を、悠然として、凛然として顏色變ぜず、眼もたじろがざるにあらずや、三艇相並ぶや、一發の砲聲は一齊に三艇を出しぬ、航程半ばに至り、白は勢頓みに落ち、衆目は青赤のみに注聚せられぬ、二艇互角に進み、何れか劣り何れ勝るか辨ずる能はず、實に双龍波上に玉を爭ふに似たり、其の勝敗は最后の〆ビーに在り、已にして砲聲轟き、僅々半艇身の小差を以て我事止んぬ、第十回の競爭終るや、審判員協議すること半時、本日第二着中の優等艇を撰出して特選競漕を行はるゝことゝなれり、我第一撰手も撰に當る、即ち第十一回に於て我校、滋賀二中、岡山中學の競爭と決定せられたり、然れども滋賀二中は何故にや出漕することを肯んぜざるを以て我が撰手(赤)と岡山中學(白)との競漕となれり、二艇出發するや、白はよくバックリワードをきかせしも、我が健兒の猛烈なる疾漕には對抗すること能はず、次第々々に秡き越され、回復すること能はずして遂に約三艇身の差を以て我が勝利に歸せり、尙本日名譽競漕に加はりしは滋賀縣商業學校、島根縣第一中學校、秋田縣師範學校の三艇にして、滋賀商業よく爭ひしと雖も、遂に僅か數尺の差を以て月桂冠は島根一中に歸しぬ、

そも我が撰手諸君は炎威鉄石を鑠かす夏の日、試驗中と云はず休暇中と云はず、他の會員は勉學し、晝寢の夢に耽けりし時、よく其の責任を重せられ、練りに練り、鍛へに鍛へし手腕を以てして、天運とは云ひながら一朝競漕場裡に全勝を得ざりしは嘆惜に堪ざる所あるべし、雖然近年我校運動界はあまりに隆盛ならず、造艇界の如きは殊に然り、去歳三艘の堅艇新造せられたりと雖、端艇競爭會に二組の撰手を出しゝ如きは我等の知らざる所あり、將に端艇界に於ける我校昔時の雄名は消失せんとも、此の時に當りて、撰手諸君は巧妙熟練の鐵腕を揮ひて、男らしく、勇ましく競漕し、我校雄名の消失せんとするを維持せられしは、我等の大に感謝し、はた賞賛する所あり、爾來益練達し、又後輩を扶導し、來る年の競漕場裡に大勝を得、以て端艇界に於て鴉湖の東、金龜城下に大敵手あることを知らしめられむことを希望するものあり、爰に撰手諸君の姓名を錄し、其の勞を謝す。

第一撰手

舵手　北川九一郎　整調　山田宇三郎
五番　村上義一　四番　中川作平
三番　竹内賢吉　二番　北川久一
艇舳　前川利七

第二撰手

舵手　上野治三郎　整調　大日方正隆
五番　淺見一雄　四番　佐藤欽治
三番　久能幹　二番　若森梅三郎
艇舳　木村文造

因に云ふ、本校卒業生金田政四郎君は我が撰手の爲め、大に斡旋せられたり、茲に謝す。

◎京都武德殿青年演武大會劍道仕合

毎年八月上旬に擧行せらるゝ大日本武德會本部の青年演武大會に例よりて本年も八月四日より同七日に至る四日の間を通じて諸種の武技を試みらるゝ事とあれり、而して今五日は洛東平安神宮の左側ある武德殿に於て全國の青年が劍道の手腕を示すべき日あり、我校よりは五年級生徒西村正一君三年級生徒宮野專太郎君同折笠晴俊君の三名を選手として派遣せられぬ。

當日は朝來一點の雲なく東山の翠樹を漏れくる旭光輝やかしく大極殿の碧瓦に映ずる中を演武者と觀覽人と三々五々武德殿をさして歩を運ぶ内に我等も午前八時殿に到れば宏壯なる建築の正面には玉座を設け中央の板間を道場として其周圍には一般會員の觀覽席をしつらへあり。と見る玉座の左右には内外の貴顯紳士綺羅星の如くに居並びて道場を俯觀し、道場には數百の黑丈夫腕を扼して控へたる有樣恰も両軍交戰せむと欲して殺氣先空に充つるの慨あり。やがて開始の時刻を報ずるや呼聲につれて左右より陸續現はれ出づる好丈夫本部教官が審判の下に互に龍唸虎嘯の技を演せしが遠がは各校に名ある選手だけありて其技の精妙なる其体度の整然たる轉た感歎の外なき樣あり。既にして滋賀縣第一中學校と呼ぶ聲のふと耳に觸れたれば胸先躍りて目を睜るに此方より立上りたるは紛ふ方なき我選手折笠晴俊其人也。同時に彼方よりも一人の武者現はれて互にしばし透を窺ひしがヤッと云ふ聲と共に双方刃を合せしと見る見る勝負は定まれり。最早云ふに忍びず嗚呼。繼で數番目毎に宮野西村の二氏も畢世の手腕を振ひしが一人位はと望みし甲斐も中々に我よりは一歩進める敵が利刃の下に三名共に空しく恨を呑みて、あえなき討死を遂げたり。

終りに臨みて吾人は選出せられし三君が炎熱をも辞せずよく我校の爲め其責任を盡されし事を感謝す。

◎同柔道大會　昨五日の劍道に次で本日六日は同じく武德殿に於て柔道の大會を催ほされぬ。我校よりは五年級生徒寺前伊三君及び同淺見一雄君の両名衆生中より擢んでられて出演せらるゝ事とあれり此日も天氣清朗にして會場の光景亦前日と異なるなし豫定の時刻に武德殿に到れば昨日時遲れて仕合を中止せし劍道の餘りを執行せる最中にて竹刀の音人々の掛聲高く場外に迄響けり。かくて劍道仕合は午

前十一時半に至りて漸く了りを告げたれば其より半時間が間は本部教官自ら稽古着を着し志望者に柔道の豫習をおさしめらるれば數多の演武者競ふてこれが教授に預からむと式禮しては飛び付くも〳〵〳〵悉く跳ね飛ばされ投げつけらるゝを見て柔道の技がかく迄達否の差あるものかと竊に驚歎せられたり。午後一時より初めて各青年の競技は開始せられぬ。劍道の時と同樣本部教官が審判の下に擧行せらるゝや又呼聲につれて東西より罷り出づる演武者の中には鬼をも欺むく偉丈夫もあればまた若殿風の優男もあり。されど勇氣は何れ劣らぬ益良雄が滿身の秘術を盡して爭ふ事あれば或は牡丹に狂ふ唐獅子の如く將た雪に縺るゝ狗兒の如く轉々又轉々投げられしかと見れば危く踏み止まり抑へられしかと見れば急に跳ね返へす等眼にも止まらぬ早業は並み居る見物をして思はず喝采せしめむと欲せしむる事一再にして止まず、勇壯快活なる事昨の劍道仕合に勝るとも劣らじと覺えぬ。

既にして刻移りて午後四時となるや待ちに待ちたる我校選手の順番となれり。前は寺前君にて敵手は兵庫縣盛武館の勇士三木鐵之助とて名詮自稱の鐵漢也稍霎時は双方白眼み合ひの姿なりしが機合熟してヤツと何れなりしか咄嗟の懸聲と共に両人共倒れの有樣となりしより或は上になり或は下になり両虎の深山に挑むが如く或は双鰐の深淵に相搏つが如く十數分の間組合ひたる儘終に勝負つかずして引分けとなりぬ。其より後復た數回ありて次に淺見君の番は來れり。此度の敵は名にしおふ信濃の山間に鍛ひし長野中學の撰手丸山壽一郎とて前敵三木にもをさ〳〵劣らざる達人とぞ聞こえし。今度の勝負如何あらむと片唾を呑んで控ゆる折しも悠忽として二人は組み付くと等しく鞏とばかりに打倒れ或時は敵我撰手を抑へて思はず冷汗を流さしめ或時は我敵手を捻ぢ伏せて心密かに希待せしめし事等ありしが双方の力量に甲乙やおかりけむ、終に再び引分けとなりぬ。かくて午後五時本日の試合は畢りを告げぬ。劍道の口惜しき結果なりしに反して二君とも斯の如き强敵にも屈せず共に引分けに畢らしめたるは偏に日頃鍛練の忽せならざりしと能く其職責を重んじられしと功あらずんばあるべからず。此に之を記して以て其勞を謝せ。

◎北川久一君夭折す

時は去ぬる八月廿六日の事也我四百の健兒は暑中休暇の最中とて各がじゝ山川に浮かれ樂しめる折誰か又我健兒の一名が忌はしき病魔の虜となりて逝く事を思はむや。第三年級甲組生徒北川久一君は本年八月四日大津に於て擧行せられし武德會端艇競漕會に我校第一撰手として三伏の暑をも厭はず日々練習せられし結果首尾よく敵手を斃して我校の名譽を擧げられしが爾來健康舊の如くならず。恐るべき脚氣病の襲ふ所となりしかば鄕里高島郡に歸りて專ら療養を事とせられしも病勢日に危篤に陷り百方醫藥に手を盡されし甲斐もなく終に前記廿六日空しく前途有望の形骸を留めて幽冥の境に旅立たれぬ悲哉君性溫厚學術優等にして殊に運動の戲に博く本校に笈を負はれしより未だ三星霜を經ざるに天禀の才能は早くも衆の認むる所となり或は副級長となり或は本會水上部理事となり又寄宿舍にては炊事員の任を承けらるゝ等ひたすら身心を勞して衆生の爲め奔命盡悴せられしかば衆生の信賴大方ならざりしに惜哉天此人に齡をかさず暖かき春の日を待つ花の蕾をあえなくも散らし畢りぬ。噫。行年僅に十八歳。

◎野球撰手夏季練習

我野球部の撰手副撰手十八名は平時の練習を以て未だ足らずとなし九月一日より十日間第三高の撰手多胡君の指導の下に夏季練習を實行せり、由來何事にまれ暑中七週日の休暇中無爲に過せば必ず前日に習得せし効果をして無駄ならしむるものにして殊に野球に於て最も其然るを覺ゆ我撰手諸子が此に心付きて夏季練習を創められしは最も其當を得たるものと云ふべし

◎福永先生

本校体操教授福永先生は今回勤務演習の募集に應じ九月一日第九聯隊へ入營せられぬ

爾來生等は五旬の間先生の溫顏に接すること能はずと雖も、國家の大任又如何ともおす可からず、唯々先生が益健全にこの任を果たされ歸校教鞭を取られむこと、生等深く切望する處あり。

◎第二學期始業式　九月十一日第二學期始業式は擧行されぬ、即ち例に依り一同講堂に參集し、校長の訓示あり、十一時全く式を終りぬ。

◎級長更迭　第三年級甲組副級長北川久一君は病死せられたるに依り其後任として三上哲嚴君又第二年級々長北野憲三君は轉校せられたるに依り、北村次郎君其後任として孰れも九月十二日任命せられたり。

九月十四日一年級々長左の如く任命ありたり。

甲組級長　居川市二　同副級長　文室重敏
乙組級長　高畑淺次郎　同副級長　明石順三

◎第三回懸賞當選披露　九月十五日發表せり其姓名を擧ぐれば、

海事思想を養成すべし　五年級　林　正義
翁　同　河瀨政七
精魂　四年級　村上義一
彦根城　三年級　西澤德二郎
躰育の必要　一年級　山田武治

◎本會理事更迭　本會水上部理事北川久一君は病死せられたるに依り、後任撰擧の結果若森梅二郎君當選し九月廿一日任命せられたり。

◎草取り　愉快ありし暑中休暇も打ち過ぎ、四百の學兒は再び故山の山水を捨てゝ校門に集れば、最愛なる運動場裡は雜草茫々として脛を埋め、立錐の地を余さず、徒らに虫類の棲家たらむとす、依て例により各組分に區劃し互に先を爭ひ旬おらずして全く取り捨て、再びバットの響きを高からしめぬ。

◎招魂社參拜　我校は例により、九月二十二日一同運動場に整列し体操教監の指揮の下に招魂社に至り、各級分に社前に横隊を作り、謹愼誠意を以て參拜を終り、正午歸校せり。

◎福永先生を送る　兼て勤務演習の爲め入隊中ありし福永先生は、今回都合に依り其職を辭せられぬ、先生が在職中いかに其職に盡瘁されしかは事々しく云はずもかな、唯其厚恩を謝すると共に益健在せられむことを祈りて止まざるあり（九月廿九日）

◎秋季身体檢査　十月十五日本校々醫樋口先生につきて秋季身体檢査を執行せらる、時正に中秋日頃の運動にて体格は良好ありしが時節柄トラホーム等眼病者の多かりしは遺憾あり。

◎終日遠足　明治三十六年十月九日我が校一同終日遠足の爲にとて、龍應山西明寺の靈地を訪ふ。寺は犬上郡東甲良村字池寺にあり。

月落ち烏啼く金龜山の曉、鐘聲六つを告ぐる頃、四百の一行は曉々喇叭の一曲諸共に校門を出づ。市街を貫きて路芹水の潺溪に沿ふ、堤草を蹈めば白銀のやうなる玉露杖頭に花散り、鈴に似たる虫韻鞋底に消ゆ、遠山にかゝる白雲は櫻花かとあやまたれ、をちこち梢は紅葉して畫の如く見ゆ。やがて名も面白き鞍掛山を眼前咫尺に見る、碧流一帶山麓を廻り、峰影倒涵色頗る麗淸あり、若し夫れ一天雲晴れて峰頭新月の霄如何に心ゆくらむよ。路はやがて黃雲の稻田を穿ちゆき、敏滿寺山を過ぎて今しかゝるは犬上川、蜿蜒幾里水無く砂白し。両岸の碧雲すべて是れ松林にして、あゝ此處思ひも出づる往春我等が演習地。

野人の籬落、木槿一枝花紅あり、眼瞳一瞬かいまみて路は分一分寸一寸と爪先上りに上りゆく。

隔墻見角便是牛隔山見煙便知是火のおらひにて、見渡すかぎた、山峰の麓甍を林巒杳靄の間に隱見す、是れ西明蘭若たるを知るあり、やがて山逕曲々天兒屋尊神社前を過ぎ數丁にして山門に入る、徐ろに靑苔に點じ石段を拾ふ、あはれ幾ぞ年櫛風沐雨に露されたりけむ三十六坊秋寂々として楓杉の茂みが中に參差せり、甍破れては霧不斷の香を焚き樞朽ちては月常住の燈をかゝぐといはまほし、さはれ猶歩を進むれば、二王樓門に入る、佛閣三層塔輪奐巍然として空中に聳へ、莊嚴偉觀目を奪ふ、其寺緣起に記し

て曰く。

「抑々當寺ハ人皇五十四代仁明帝ノ御宇承和年間沙門三修、勅旨ヲ奉ジテ創建スル所ニシテ佛殿及ビ三層塔二天樓門皆一千〇七十餘年ノ星霜ヲ經過シ幸ニ天災地殃ノ厄ヲ免レ以テ明治ノ聖代ニ至ル實ニ佛天隆域ノ靈地トス」

と。我等一同恭敬頂禮し奉り、佛像古遺品を拜觀す、あゝ此佛殿の東西龍の伏せる形にて流れあり、南北に虎の崟まる靈岳あり、曉岩壁のさゝがしきを過れば、雲徑行の跡を埋み、夜羅涸の幽かなるに眠れば風坐禪の窓を訪ふ可く又なき仙寰なり。

時に雲岫に返り、倦鳥林に投ず、我等一行寺を辞して又歸に就く、彦根に入る、殘陽空しく孤城にうつろひ、うすれ行く夕暮、鐘の音あはれなり。

◎井伊直弼公降誕祭　十月十五日、金龜、城山に於て故彦根城主井伊直弼公降誕祭の大典を擧行せらる、靈は觀音臺上保勝會設立に關る亭内に奉置せらる、當日本校音樂雅亮哀惋の中に參拜し謹で靈前に頂禮し奉る、嗚呼實に感涙畏恐に堪へざるあり、後展覽品を通觀す古器珍寶頗るの物多し。

◎秋季端艇大會　秋未だ淺くして、樹葉紅ならざれども、黄葉蕭草松秀で岩聳へ大洞湖上浪漸く荒うして四百の健兒が操櫓亦此時にあり、たま〳〵彦根の有志十月十五日金龜山上井伊直弼公降誕祭を擧行せられ地方舊藩の人士三々五々相率ゐて其香靈に拜す乃ち翌十六日午後をトし大洞に秋季端艇大會を催す、天は此好機を如何思ひけん、そらかき〳〵曇りて雨さへふりきぬ、されど觀客の視線もでに我健兒に集中せり何ぞためらはんや、第一回より第十回まで過ぎて第十一回責任競爭は始りぬ、ABC各組相聲援し海上漸く腥然たりしが終にC組の勝となりぬ時に赤陽西海に沈み暮靄蒼々金龜山の頂きをかすめ、漁歌濤聲に和して漸く遠くなりゆく。

◎秋期野球大會　バット一振り熱球グラウンドに飛び熱球飛んで憂然しシットの裡にあり疾驅壘を突き唾手一番敵將を殺す變化多からずやベースの技愉快からずやベースの技時は十月の十六、十七日本會茲に秋期野球大會を催す今左に當日の優勝者の名を留め以て之を永劫に殘す

回投捕游第第右中左得
數手手手擊一二三点
手壘壘壘翼堅翼比

一松桐中白岸大清村西七
回原田川井和田音水上正村と六

二三上平小松宮井田北十
回浦野野笹本村上喜中村一十
力と十

三久秋淺竹若西淺富馬六
回野篠見倭原森澤見一永塲と四
孟義

四湯村小北坂前干岡松五
回本林林川先本と三
敏九生川田崎繁

五宇飯黑居倉近赤山吉六
回原川田川橋野田本田三
治と

撰手競爭　早川炊珠木淺大山谷九
見尻殿玖喜野利田田七
村橋と

◎野球試合　十月二十五日本校運動場に於て、本縣商業學校黄野倶樂部と本校白球會と野球試合ありしが、時や至らざりけん地やよろしからざりげん、不幸にして吾人は我敗報を手にするに至りぬ。願くば白球會の諸君一層の勉勵あらん事を。

◎ペルシー、グランド先生を迎ふ　由來本校は他校に比し英學の研究未だ進歩せず甚だ遺憾の狀態ありしに、現校長就任以來是が隆盛を期し、今度八幡商業學校御傭教師ペルシー、グランド氏に本校四五學年英語教授を囑托せられたり、先生は米國チヴアダ州の人、カリホルニヤ大學を卒業し、現今本縣商業學校に教鞭を執られつゝある人、十月三十一日初對面式を擧行せらる、吾等は茲にこの良先生

を得て一層の勉學を誓ふと共に、前途春秋に富み、學識ひろき先生の幸に、本校の爲めに盡瘁せられん事をのぞむものあり。

◎三高野球大會　紅蘆萬丈、吹き來る風も白粉くさき京洛の地、こゝは又市蘆を離れて、剛健尙武の氣風、天地に漲れる吉田山下、第三高等學校の運動場には、年々近畿諸學校より、撰手を集めて、聯合野球大會を催さるゝ例あるが、今年もこゝに十一月一日、二日、三日と打ちつゞき、熱球空に飛ばすことにはありぬ。我撰手も又招きに應じ一日第一回といふに、三重一中の撰手と技を競ひたり。彼我の撰手は實に左の如くありき。

P	佐藤	三郎
C	二宮	洋治郎
SS	鷲尾	弘準
1B	伊藤	秀三
2B	三谷	爲三
3B	中村	喜一郎
RF	笹尾	宗貫
CF	中島	一郎
LF	桑山	孝之助

P	早見	與之助
C	川尻	靜雄
SS	炊殿	雄一郎
1B	珠玖	退三郎
2B	木村	喜治郎
3B	淺野	治三郎
RF	大橋	利三
CF	山田	善三
LF	谷田	秀吉

三重一中（白）　滋賀一中（紅）

紅軍先づ守り、白軍攻む。

第一回	白	十点	紅	○
第二回	白	三点	紅	一点
第三回	白	三点	紅	○
第四回	白	○	紅	四点
第五回	白	○	紅	○
第六回	白	四点	紅	○
第七回	白	○	紅	○
第八回	白	四点	紅	○
第九回	白	○	紅	○

右の如き点數を以て、白軍の勝利とありて競技を終へたり。それ勝敗は時の運のみ、撰手諸君決して落膽し給ふか、吾人は諸君が勞を謝し、併せて一層の

練習を積まれんことを希望す。殊に後進誘導には、大に意を注がれたきものあり。

因に、在京の先輩諸氏は、撰手を宿所に訪ひて、菓子を多量に惠與せられ、殊に萬事に周旋せられたり、又聖護院町の中川双園堂よりは、狀袋を贈られたり、幷びに記して其好意を謝す。

◎天長節拜賀式　金風颯々として、旭旗を飜し、曈々たる旭日之に映じて。瑞氣宇宙に滿ち歡聲天地をふ、例によりて職員生徒一同は、當日本校講堂に整列して、拜賀の式を擧行し、聖壽の萬歲を祝し奉りぬ。

◎第十四回陸上運動會　天長節の拜賀式を終りて、例により、陸上運動會を本校運動場に於て催せられぬ。場は中央ある一大柱を中心として、球燈彩旗を以て飾られ、グランドの週違には、講堂の下ある來賓席を初め、會長席、艤裝席、一般來觀人席、生徒席と順次に設けられたり。

午前九時半、爆然二十一發の祝砲を合圖に競爭は開始せられぬ。第一回、一週競爭を始めとして、二週三週と間斷おく、競爭しぬ、何づれも小供連の集り短き足を目も見えぬばかりに早く運ばすは見事あれども、中途にて倒るゝあり。後にありつ、前にありつする間に欠勝線に入るが故に、出發の際、機を得て先とありしが勝を占むること多し。

第四回　一分間競爭＝目的地おく、たゞ出發してより一分間後の號砲まで、韋駄天と走るあり。此銃聲の響きし時、先登に走りしは稻島定信氏あり。

第五回　一週競爭の第1着、辻盛太氏。次いで三週競爭は健脚家の聞えある、宮田與惣松氏第1着とありぬ。

第七回　三分間競爭＝前の一分間競爭と等しく、ひた走りに三分間走るあり。號砲の響きし時、先登に立ちしは、地方よりの通學に脚を固めし、小菅甚次郎氏

第八回　正裝競爭＝出校するに時少く、城山のゴーンを聞いて走り出づるが如し、ゲートル、靴の右左を取り違へるあり、胴じめを倒にして、あせるあり

何づれも、急ぎ、あわてゝ欠勝線に入り、服裝檢査にアウトとある者多く、第1着は西澤德次郎氏とありぬ。

第九回　四週競爭第1着、溝江永松氏。つゞいて、一週競爭、二分間競爭あり。第十回は湯本辰雄氏、

第十一回　は廣瀨淵龍氏、勝を占めぬ。

第十二回　一人一脚＝其名の如く両脚を縛りて、一ツとおして飛び行くあり甚だ不自由にて倒るゝあり一走しては休むあり。遂に第1着は瀨川直三氏あり。

第十三回　五週競爭第1着村林喜一氏。

第十四回　三週競爭第1着澤田泰三氏。

第十五　十六の両回は千鳥競爭あり、相對列して、紅白の旗を送り廻し、其早く終りし方、勝を得るあり。人は異れども二回とも白軍の勝とありぬ。

第十七回　二週競爭第1着清水寛一氏。

第十八回　一人一脚二週の第1着は佐藤欽次氏。

第十九、二十の両回は武裝競爭あり。出陣の軍人の前に敵をひかへて用意をおすが如く、急がざるべからず然れども急いで用具を取落すべからず、急いで急くべからずとは此れの事あるか。前の第1着は久野幹氏。後の第1着は今村房一氏あり、

第二十一回　正裝競爭は尾川織市氏先着たり。

第二十二回　二分間競爭第1着馬場信吉氏。

此處に番外として小學生徒一週競爭あり。三十三間堂の佛の如く、頭を連らねて幷び、出發の際倒るゝあり、機を得て先んずる者は勝を占む、總ずるに無邪氣かる競爭あり。

第二十三回　五分間競爭第1着三上哲巖氏。

時將に午あり、此處にて一先づ休息し中食とはあしぬ。

午後一時再び響く號砲と共に競爭は開始せられぬ。

第二十四回　一週競爭第1着藤井清氏。

第二十五回　四週競爭

第二十六回　一人一脚

第二十七回　六週競爭＝十余町の競爭あり。始めの中は靜かありしが、早や五週も了りて、今一週と云ふに皆々、一時に走り出で、第1着に欠勝線に入りしは、三分十七秒にて秋篠義一氏あり。

第二十八回　の千鳥競爭も又、白軍の勝とありぬ。

第二十九回　三十の両回は障害物競爭あり。出發点に近き繩にかゝりて倒るゝあり。棚の上り場にまよふあり。幅飛びにしくじるあり。大の男が小さ金輪をくゞるに困ずるあり、かくても凡べての困難を通過して第1に着きしは、前回にては村瀨留三氏、後にては淺見一雄氏あり。

第三十一回　一分間競爭第1着馬場信吉氏。

第三十二回　四週競爭第1着三上哲巖氏。

第三十三回　五分間競爭は上野二三氏の勝とありぬ

それより三十四、三十五と順次に一人一脚、六週競爭あどありて、第四十回に至りぬ。喝采の聲さわがしき中に職員競爭は初まりたり、我等とて奥の手は此の如きぞと第一に欠勝点に入り給ひしは杉浦先生次いでは松浦先生、伊藤先生あり。此くも我部にかゝわり給ふ先生のみの勝ち給ひしは、我部もかか〳〵盛んありと云ふべし。

ついで番外として佛中生徒の來賓競爭あり。

本年よりは各級撰手競爭を廢せられて、少しく物足らぬ感ありしも、之に代ふるに優勝者競爭とて、本日競技中優勝ありしものゝ競爭あり。そは第四十一回に於て行はれぬ。此名譽ある競爭に出でられ諸氏及び、之に勝を占められし諸氏の名を記し以て此名譽ある競爭に出でられしを祝し併せて、健在ならむを祈る。

第1着　淺見一雄氏　第2着　三上哲巖氏
第3着　宮田與惣松氏

（以下不順）

溝江永松氏　小管甚治郎氏
廣瀨淵龍氏　村林善一氏
澤田泰造氏　馬場信吉氏
香水作二郎氏　秋篠義一氏
上野二三氏　北村力氏

此所に於て職員生徒一同、運動場に集りて聖壽の萬

歳を祝して解散しぬ。時に午後五。時夕陽西に落ち。暮れ鴉の聲し。

◎修學旅行　金風颯々、瀟氣天地に滿つ、肥馬は、いて男兒、肉の歎に堪へず、いでや人々膝栗毛と、寄ると觸るの評定も、愈々定りて、五年は十一月四日より両丹播攝に、四年は四國巡りと定りて一日晩れて出發する事となりぬ、但し三二一年は西江州なる中江藤樹先生の古蹟を見物する爲め、七日終日旅行せり。

◎曾田先生　彌生の花は風必ずさそひ、十五夜の月雲かゝらぬはなしとは云ひながら、さても無情なの世の中や、思へば去る六月のはじめつかた、かりそめの床につき給ひしとの事を漏れ承り、痛く驚きて、如何にもしてと神かけて、祈りし甲斐に一度は、快癒し給ひしかば、皆々一方ならず喜びしに、あゝ無情其の暇もあらせず、無情の天は、再び先生を苦めて、生等の祈を顧みず、遂に先生をして、止むなく職を休めて、故山に靜養せしむるに至りぬ、顧れば先生の本校に教鞭を採られてより茲に六年、雨の日、雪の日の厭ひなく、偏に本校の爲めに盡力せられ、本校數學科をして一大進歩をなさしめ給ひぬ今や此良先生、天涯壹百里、故山の風物に、靜々身を養ひ給ふ、吾人實に追慕の念に堪へず、願くば神明、幸を先生に垂れ、再び吾人をして、先生の温容に接せしめよ。

◎天皇陛下奉送迎　金風颯として吹き、天地うたゝ殺肅の氣を呈す、此の時に際し播州の原野に於て陸軍大演習を擧行せらる、我が叡聖文武　皇帝陛下に於せられては、かたじけなくも御統監あらせらるゝ爲め、去る十一月十二日、當彦根驛御通過、演習地に行幸あらせられたり、職員生徒一同は當驛に謹んで奉送迎せり、又同月十八日演習地より御還幸ありたれば、生徒職員一同は、同じく謹んで奉送迎せり、

◎理事撰手慰勞會　風空に寂寥の聲を放ち落葉地に蕭殺の響をなす滿天の色氣朗なる時は蓋し團

欒に適す理事撰手慰勞會は此十一月廿一日を以て本校寄宿舍講堂に開かれぬ席既に定まるや會長起つて開會の辭を述べられ續いて平瀨、小出兩先生の懇篤なる訓辭あり其間茶菓は職員諸氏の手によつて各自に分配せられ飲みつ食ひつ午時數刻を過せしが日は漸く傾きて晩鴉呀に城山を指す即快を割いて散會す

◎劍柔兩道小會　我が校夙に劍柔の兩道を設け炎日寒天と云はず練習おこたる事なし。十二月六日平素の練腕をためさむとて本校道場にて劍柔兩道の仕合を開きぬ。集り來る四百余の健兒何づれも健腕を磨してひかへ居れり。劍道は坂、吉居の兩先生審判の下に午前八時より始まり柔道は午後より山上先生審判の下に行はれぬ。

◎第二學期試驗と冬季休暇　嚴正なる吾人の試驗は吾人が實力を評騭せむが爲めに十二月十五日より廿一日迄執行せられたり。平時心掛よき勤勉家は相當の好成蹟を得て、莞爾たるに反して、自然の遊樂に迷ひて教科書を御留守にせし怠惰漢は天罰覿面の不結果に頭痛打たすぞ哀れなる。されど前者以て驕るべからず、後者徒らに失望するなく、相共に研鑽怠らず、未來の大成を期すべし。

同廿二日より學生が唯一の快季たる冬期休暇は吾人を迎へぬ。過ぎにし數日間の試驗に苦しめし腦髓を休めむ爲め、何れも行李片手に東西南北ちり〳〵に各故郷さして歸り行かるゝあらむ。吾人は諸君がなつかしき父母兄弟と共に幸福なる新年を迎へられて來らむ一月八日の始業式には再び健全なる面影を此校内に現はんむ事を望む。

◎新年拜賀式　千代田の宮の松翠ます〳〵深く、四海波穩やかに、和氣靄々たる雲居には、瑞龍かけりて、新らたなる明治三十七年は來たりぬ、この嘉氣洋々たる初旭影に浴しては、我が國民たるもの誰れか謹しみて、聖壽の萬歳を祝し奉り、國家安泰、同胞の和樂なるを賀せざらんや、我が校も例によりて、午前九時講堂に於て、拜賀式を擧行せらる先づ職員生徒一同「君が代」を三唱し、小川教諭は校

長代理として、一同に代はりて新年の賀辭を奏せられ、再び「君が代」を三唱し式終はり、一同退場せり、

◎第三學期始業式　一月八日、例年の如く第三學期始業式を雨天体操場に於て行はる、草場教頭は校長代理として始業の辭を述べられ、且つ教育上の懇篤なる注意談ありて式終はれり、

◎臨時雪中行軍　四五日前より降り連りし雪は已に二尺にも餘り綠なりし山も、青かりし野も堤も、恰も白帛に包まれしやう、銀世界の有樣殊に麗はしく、梢に積りし白雪は鵞毛の如く、柳架の如く、あち、こち見ゆる雪達磨、一入冬の景色を添へて、見事さ云はむ方なく、迚も都人の想像すべきに非ず。時しも俄然雪中行軍の擧あり、正月九日は其當日なり。

湯氣立つ辨當腰にぶら下げ、外套片手に雪を蹴て集る健兒三百有余名、先ず裁判所前に整列し、池田、福永両先生監督の下に足並み正しく進軍を始めぬ、京橋通りを東に折れ白壁町を南に曲り、大工町より

土橋に出で、河原町、芹橋、新町を過ぎ、路を高宮街道に取り、多賀方向に進軍しぬ、

厚かりし雪雲次第々々に散り失せて、影だに止めず、陽光微々として地面を照し、寒風凛々として健兒が雙手氷らむばかり、見渡す限り、一点の黑色を認めず、恍として身は玉樓の中に在るかと怪まる、一行漸く高宮驛に着き、前隊正に南端に出でむとする頃突然雪戰の命下りぬ、時に十時を過ぐる五十分なり、十五分間休憩の後開戰の命傳りぬ、是に於てか衆鉄腕を扼して、氣骨滿面に溢れ、殺氣勃々として止む所を知らず、而して各部署を記せば左の如し。

攻擊軍（北軍）　指揮官　福永先生（四、甲、三、乙、丙、二、甲、一乙之に屬す）

防禦軍（南軍）　指揮官　池田先生（四、乙、三、甲、二、乙、一甲之に屬す）

已にして北軍は高宮南端に集合し、指令長官より左の令あり。

想定

一、昨日大堀附近に戰ひし敵は南方に退却せり。

命令

一、確報に依れば敵は多賀方向に退却中なり。

二、我支隊は之れを攻擊せんとす。

三、第一小隊（四、甲）は先兵となり、多賀に向ひ前進すべし。

教命

一、敵は我と服裝を同ふす但し我軍外の者を以て敵と見做すべし。

二、彈丸は雪を以てもべし。

令終るや、第一小隊は直ちに斥候三名を派して敵情の搜索を始めぬ、暫時にして一斥候躰を横にし、飛鳥の如く走り來りて報じて曰く『敵の斥候多賀北端に陰顯す、終り』と忽ちにして再び報じて曰く『土人の言に依れば敵の歩兵約二小隊多賀旅所に散兵せるもの〻如し、終り』と、愈敵兵は近きぬ、健兒の鉄肘思はずムズ〳〵するを覺えぬ、すはや斥候の衝突は起れり、白彈空に飛ひて、雪を蹴て馳せ違ふ黑影四五點、斯くと見たる北軍は直ちに先兵をして之れを擊退せしめ、旅所の西端燈籠附近を占領せり、遙に前方を瞰視すれば、我を隔つる百米あらずして敵の歩兵約二小隊、東方の高地に據り、敵や遲しと待ち構へたり、両軍互に睥睨すること稍久しく、寸毛の隙だにあらば衝かんずる樣鼠に於ける猫に異あらず、忽ちにして導火線は開かれぬ、白彈空に走りて、関聲天地に轟き、千軍万馬右に走り左に馳せ、孰れを敵と分つを得ず互に吳孫の軍略を用ひ、韜略の計を盡し魚鱗に圍めば鶴翼に開き、神出奇沒、雌雄未だ決せず、折しも南軍援を得て勇氣百倍せり、北軍もさる者、兼て後背に控へし、援軍一時にドット散兵し、今や一大決戰は演ぜられぬ、空に飛び交ふ白彈は、當れば即ち落花と散り、白雪忽ち紅あらねど泥土に染み濁流滾々として其物凄さ肝を寒からしむ、南軍漸く色めくよと見る間に忽ち北軍に起る吶喊の聲、天に轟き地に響き山岳爲めに裂けんとし、地爲めに振はんとす、両軍今や接戰して、修羅の巷

を演出せんとする一刹那、曉々たる戰鬪中止の喇叭は清く吹き渡りぬ、於是一同再び列を整へ、多賀大社に參拜の後指揮官より講評あり、要に曰く

北軍

一、先兵の燈籠附近を占領せしは可あり。

一、第一小隊の直ちに散兵線に入らざりしは不可あり、援軍の散兵は大によし。

南軍

一、山麓(高地)散兵せしはよし。

一、援軍の道路に困まり、爲めに敵彈を多く受け退却の止むを得ざるに至りしは不可あり。

右終りて三年級以上は嘉喜樓に、以下は龜屋に各々中食を喫しぬ。時に十一時四十分あり。

○時三十分一同再び列を正し路を土田に取り二時無事歸校せり。

◎學事奬勵金寄付　舊臘犬上郡豊郷村伊藤忠兵衛氏より金五百圓倶に學事奬勵金として寄付せられたり吾人は此處に其好意を感謝す。

◎水野先生を送る　日露の協商破裂して。召集の大命各師團に下る、宣戰の大詔又煥發せられんとして、忠勇ある國民の士氣、茲に昂る、時二月九日、水野先生又第一師團の召集に應じて、我校を去らる、先生の我校に赴任せられしは、去る明治三十五年九月、爾來熱心と、誠實とを以て、吾等を運動場裡に訓練せられしに、日露の交戰は、端あくも、此懇篤ある先生を、吾等の手より奪ひ去りぬ、告別の情、堪へざる者あれども、そは私情也、國家の大任を以て、出發せらる、先生の行を壯にすべく、我校は午後一時告別式を行ひ、次いで、二時五十分、職員生徒一同、停車場に見送れり、吾等は、先生が自重自愛、國家の任務を全うせられんことを祈る、

◎宣戰の詔勅下る　宣戰の詔勅は下れり、仁川沖旅順港外の捷報は至れり、さあきだに歡呼せし國民は、狂喜せり、戰勝祝賀會、恤兵献金、提灯行列は至る處に行はれて、天地爲めに震動せんとす、是忠勇ある國民の國を愛する情の溢れし者、國民として嘉すべきことあれども、之が爲めに各自の職責を全うせざるが如きは、喜ぶべきことに非ざるべし、されば吾等學生は、平時の沈着ある擧動を失はず、益眞面目に勉學すべき也、之れ聖詔の意のある所、學生の務といふべし。

◎御斷り　去る三十六年九月以來本號の材料として募集文を諸君に求めたる事前后二回諸君の熱心ある同情と發奮により茲に豫想以上の好結果を得て崇廣第廿號を發刊するを得たるは深く理事一同の感謝する所也。然るに本部財政の窮乏は本誌紙數の制限を餘儀なくせられ、爲めに甚だ申譯なき次第ながら一人にして多數の同種原稿を投せられたる向には已を得ず其中にて特に優等なる分をのみ掲載する事に決したり。一言以て諸君の疑團を解く事爾り、猶一人にして一編を投せられたるものと雖も編輯期限后に至りて達したるものは已を得ず規定に從つて沒書とせり。諸君諒之。

◎寄贈雜誌

校友會雜誌　一二九
一橋會雜誌　三
渦の音　六、七
校友會雜誌　六、七
六稜　二三、二四
近江尙商會々誌　四六、四七
保惠會雜誌　八一
學友會誌　四
坂東太郎　三七
學友會雜誌　一〇
海原　四
山本小學校同窓會々誌　三
稱好塾報
親友會雜誌　三
學友會雜誌　一〇
龔城文庫　一四
校友會雜誌　八
知道　六
華陽　三二
學友會報　二一
鶴城　一〇
學林　五七
尙志會雜誌　五七、五八
第一高等學校友會
東京高等商業學校一橋會
德島中學同志會
京北中學校校友會
大阪府立北野中學校校友會
近江尙商會
愛媛縣立松山中學校保惠會
京都府立第二中學校學友會
群馬縣立前橋中學校學友會
島根縣立第一中學校學友會
海城學校日比谷中學校學友會
山本小學校同窓會
稱好塾
柏崎中學校親友會
奈良縣郡山中學校學友會
大垣中學々生會
大成中學校校友會
茨城縣水戸中學校知道會
岐阜縣立岐阜中學校華陽會
山口高等學校學友會
岡山縣立津山中學校濟美會
愛知縣立第一中學校學友會
第二高等學校尙志會

◎投稿規則

一、投稿ハ學術ノ範圍ニ於テシ決シテ政治的時事論ニ渉ル可カラズ

一、投稿ハ本會所定ノ用紙ニ楷書ニテ認メ平假名ヲ用フベシ

一、投稿ニハ各自句讀ヲ施スベシサレド圈点ハ一切施スコトヲ禁ズ

一、投稿等其ノ篇ヲ異ニスル毎ニ其ノ用紙ヲ改メ題ノ下ニ級組及ビ姓名ヲ明記スベシ

一、投稿ハ其ノ長短ヲ問ハズ全篇定備セルモノタル可シ

一、投稿ハ其ノ掲否ニ關ラズ總テ之ヲ返戻セズ

一、投稿ノ締切期限ハ其ノ都度之ヲ定メテ一般ニ通知スルモノトス

明治廿七年五月卅日內務省許可
明治三十七年三月十一日印刷
明治三十七年三月十三日發行
（非賣品）
滋賀縣犬上郡彦根町大字中組東
第二十三番屋敷
編輯兼發行人　木川雅太郎
岐阜市笹土居町四十五番戸
印刷人　安田豊八
岐阜市笹土居町四十五番戸
印刷所　安田印刷工場
滋賀縣立第一中學校
發行所　崇廣會